



和歌山県知事指定郷土伝統工芸品

ねごろじねごろぬり

根来寺根来塗

平成19年指定 / 指定された地域(岩出市)

蘇る堅牢さと歴史を刻む用の美

大阪府との県境、東西にのびる和泉山脈の山裾に、豊かな緑の丘陵地帯が広がります。その一帯でかつて、僧兵を率いて巨大勢力を誇った根来寺。覚鑿上人^{かくぼん}によって開かれました。その名に由来する工芸品が「根来寺根来塗」。根来物や根来塗とも呼ばれ、使っほど“用の美”が増す漆器として知られています。

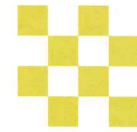
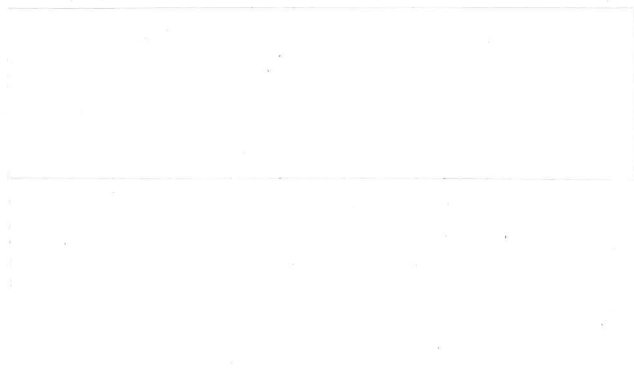


岩出市民俗資料館所蔵
根来寺碗 曙山作



● 根来寺根来塗 宗家
池ノ上 曙山さん

昭和34年生まれ、大阪府出身。根来塗研究の河田貞さんに師事し、平成12年に根来寺の許を得て、根来寺根来塗の宗家となりました。初代根来寺根来塗師として、途絶えていた根来寺での漆器を復興。現在、根来寺山内にある工房で、昔ながらの技法を用い、産地としての根来寺根来塗を制作。岩出市伝承事業一般・プロ養成講座にも意欲的に取り組み、後継者を育成しています。



使うことで完成する“用の美”

根来塗とは、上塗りの朱と下塗りの黒、この2色の漆が施された木製の器のことを指します。朱色は使い込んでいくことで“用の美”が増し、一層鮮やかになります。さらに使い続けて年月が経つと、次第に朱色の一部がすれ落ち、下から黒漆の一部が現れて、趣のある色合いを醸し出すことから、年月に耐えた美しさを讃えて“用の美”といわれています。そもそも漆器は、貴族文化や宗教文化とともに発展してきた文化です。中でも根来塗は、椀や鉢、膳など、僧侶の日常を支える身近な食器として生産され、堅牢さに加え、使いやすく飽きのこない、デザイン性の高いものが追求されてきました。

天下統一のために途絶えた根来塗

収集家の間で幻と呼ばれる根来塗。数が少ない希少性ゆえのことですが、それには理由があります。根来寺は、覚鑿上人が高野山に学問探究の伝法院と修禪の道場を建立したことに始まり、正応元年(1288)に今の地にやってきました。室町時代から戦国時代にかけて最盛期を迎え、境内には堂塔や伽藍のほか、強力な僧兵を有する巨大勢力を築いていました。この勢力が天下統一のための大きな障害となって、天正13年(1585)に秀吉の根来攻めに遭い、2から3の堂塔を残してすべて消失してしまいました。同時に膨大な数の漆器類やそれに関する文書、記録も消滅し、以降400年以上もこの地で根来塗の制作が途絶えたままでした。



岩出市民俗資料館所蔵

400年以上の時を越え蘇る伝統

平成12年「根来寺根来塗」は、昔ながらの技法により、産地としての根来塗が復活しました。根来寺の正式な許を得て、初代根来寺根来塗師となったのは、池ノ上曙山さん。現在、根来寺山内にある岩出市民俗資料館内の根来塗工房において、幻といわれた根来寺での根来寺根来塗を作り続けています。「もともと古物ファンの父の影響もあり、漆器の修復や鑑定の仕事をしていました。中でも根来塗に魅せられ、28歳の時に根来塗研究の第一人者である河田貞さんに師事。技術は根来塗指導員養成講座で約5年間、習練しました。」原点に立ち返り、実用性の中にある美しさを追求しています。

【根来寺根来塗の制作工程】



水に浸けても変形しにくいキノコヘラのヘラをはじめ、ほとんどの道具が職人の手作り。手に馴染む道具で強固な下地を制作します。

素材は漆と相性のいいケヤキ。角など、弱い部分に麻布を張り付け強度を上げる布着せ。堅牢さには地道な下地づくりが欠かせません。



生漆に地の粉を混ぜ、布着せの部分で下地を強化。さらに砥の粉と混ぜた漆で錆づけ。工程の大部分を下地に費やします。

下塗りの黒漆は3回、塗って乾かし、研いで塗るを繰り返します。朱漆は高台から底まですべてに。塗りの漆器は高級品の代名詞。

根来産の良質な漆を発祥の地で栽培

根来寺根来塗の大きな特徴は、毎日使い続けて、自らの手に合うよう馴染ませ、味わいを深めていく自然の造形。「展示されているものが完成ではありません。仕上げはご自身の手であり、毎日の生活。使えば使うほど美しく、さらに思い出が歴史となって積み重なる工芸品です。」そう話す根来塗師・伊藤恵さん。師匠の池ノ上曙山さんとともに、根来寺根来塗の再興と人材育成に尽力。また5年程前から、工房近くの根来山げんきの森で、ウルシの木の植林が行われています。約1000平方mの広さに50本程のウルシ。苗を植え、下草を刈り、曙山さんとその門下生たちの手で山を管理。原材料にこだわる根来寺根来塗ならではの取り組み。「整備は年に2回程度。なかなか難しいですね。樹液を採るにはまだ至りませんが、大切に育て、原材料の確保から伝統工芸というものを守り続けたいと思います。」



5年前から原材料の確保と素材学習にウルシの木を栽培。現在約50本が元気に育っています。